



HACK

は

かさぶた

KAI SHIGIHARA



## 6.かさぶた

---

### 6 かさぶた

二週間後。

レスリーは普通の職に戻っていた。何もなかったように、拍子抜けするぐらい、いつもどおりに。

思い返せば、ジュリアスと初めて会い、任務が終わって別れるまで、たったの一週間だった。一緒にすごしたのは、三日？四日？、それぐらいでしかない。仕事の性質上、親密になったように感じたけれど、日常に戻ればジュリアスはどこにも存在しなかった。

研修を受けた期間は、ドミニクからの仕事依頼を受けて第一中隊に出かけていたことになり、その後は休暇を取ったことになっている。ドミニクと顔見知りよりちょっと親しくなったことで、周囲の女性たちから羨望のまなざしを受けたが、それも二週間もたつと落ち着いてきた。レイノックスでの日焼けも、目立たなくなってきた。

「レスリー、そろそろ時間よ」

隣のチームの女性に声をかけられ、パソコンから目を上げる。気がつくと、そろそろ三時だった。三時から女性だけのミーティングが予定されている。

第一大隊の女性、事務官のみが集まるミーティングは、お互いの業務の円滑化と効率化を図るため、定期的集まって情報交換をしている。

正直、とても退屈なミーティングだが、さぼるわけにはいかない。レスリーはパソコンにロックをかけると、席を立った。

一中隊の事務官から順番に、現状の報告と問題点改善の提案をしていく。レスリーは二中隊の所属で、二中隊は事務官が多い。一番勤続年数の長い事務官が代表で発表するので、レスリーは完全に聞き役だ。軍に入隊して二年近くになるが、このミーティングで発言したことなど一度もない。今日も、一度も発言を求められることもなく、報告と提案、それに対する議論も終わりになった。だが、すぐにはミーティング終了とはならない。女同士の裏情報という名の噂話の交換会となるのが恒例だった。

レスリーは、この女同士の雑談というのが、大の苦手だ。どうでもいい情報に対して、興味ありますという顔をして聞かなければならないし、テンションが高い周囲に合わせておかないと浮いてしまう。そもそも、人の噂話は好きじゃない。ミーティングが無事に終わると、ほっとしてしまう。

(疲れたー)

思いっきり伸びをしたい気持ちを抑え、充実したミーティングだったわという顔をして廊下を歩く。

「レスリー」

背後から声をかけられ、足を止めた。振り返ると、一中隊所属の事務官が手を振っていた。レスリーよりずっと年上の大先輩だ。

「お疲れさまでした」

背中を伸ばし、きちんと挨拶する。

「ちょっとちょっと」

と、先輩はレスリーの腕をつかむと、廊下の端っこに引っ張った。そして、にやにやした顔を近づけてきた。

「あのね、ここだけの話なんだけど」

「……はい」

「一中隊、事務官増員らしいの」

「はあ」

「それね、どうやらあなたよ、レスリー」

「え」

一中隊の事務官は、事務官皆の憧れの的だ。勿論、中隊長があのドミニクだから。

でも、仕事はとても忙しい。一中隊は真っ先に外へ任務に出る隊でもあり、そのフォローは大変だ。

(マジか。残業続きじゃん)

と、レスリーは思ったが、勿論、空気読んで、喜びの表情を顔に張り付ける。

「本当ですか？」

「まず間違いないわよ。来週にも内示が出ると思う」

「えー、嬉しいけど、私なんかに務まるでしょうか」

「大丈夫大丈夫！ 優秀だって聞いているわよ。頑張りましょうね！」

レスリーの肩をたたくと、先輩はにこにこ笑顔で去っていった。

見送って、ゆっくりレスリーは歩き出す。二中隊から一中隊への異動は、それほど特別なことじゃない。そもそも二中隊は、一中隊のバックアップをしている部隊なので、人事異動も多いのだ。

(でも、このタイミングって)

ドミニクの弟ジュリアスとの仕事を終えてすぐの、このタイミング。無関係とは思えない。

軍では極秘扱いだろうジュリアスの能力について、詳しく知ってしまったレスリーを監視するために、ドミニクの目の届くところに異動ということだろうか。あり得ることだ。

(嬉しくないわけじゃないけど……)

ファンとしては、ドミニクを毎日見れるポジションに行けるのは嬉しいけれど。ジュリアスに関わってしまった以上、もうファンとしてドミニクに接するのは不可能だ。

ドミニクの端正な横顔を見るたびに、思いだしてしまう。

(かさぶたをカリカリかいちゃう感じよね)

触らなきゃ、その内完治しちゃうのに、触れば触るほどいつまでも残る。

(何が?)

と、自問自答して、思わず口元に苦笑がうかんだ。

自分に誤魔化しても仕方がない。ジュリアスへの淡い、ごくごく淡い、けれど特別な感情は、未だに残っている。帰国してから、一度もジュリアスとは連絡をとっていないし、ドミニクと彼の話をしたこともないけれど、なかなか消えてくれない。

「やあ、レスリー」

声をかけられ、驚いて顔を上げた。

目の前で、ドミニクが微笑んでいた。

「というわけで、引き継ぎが終了次第、一中隊に引っ越ししてきてほしい」

爽やかな笑顔で、きっぱりと言い渡されてしまった。

ドミニクは一中隊のドン。中隊長だ。逆らえるわけなどない。レスリーは無表情のまま、了解いたしましたと敬礼した。

「何か質問は？」

「特にありません」

「二人きりだし、何でも聞いてかまわないよ」

ドミニクの執務室には、今、二人きりだ。

そもそも、異動の辞令など、書面一枚ですむ話だ。上司と話をするとしても、異動先のドミニクではなく、現在所属している二中隊の中隊長なはず。要するに、聞けということなのだろう。

「この異動は、二週間前の任務と関係があるのですか？」

それならばと、レスリーは口にした。

「あると言えば、ある」

「それは、ジュリアスの能力について、私が知ってしまったことと関係していますか？」

「それはない」

ドミニクは、手振りでもレスリーにソファに座るように促してきた。やはり、この話をするために、この場はセッティングされたのだ。

この話を何度もするのも、色々想像するのもいやだ。納得いくまで話を聞かせてもらおうと、レスリーはソファに座った。

「ジュリアスとの任務の前に、君には秘密を守るという誓約書にサインしてもらっている。それで十分だと思っているよ」

「では、なぜ、私を一中隊に？」

「それは、君がとても有能だから」

と、ドミニクは、ジュリアスによく似た顔で、でも彼とはまるで違う爽やかな明るい微笑みをうかべた。

「ジュリアスから、君がどれほど有能かという報告を受けている。事務官よりも、もっと臨機応

変に様々なトラブルに対応するような職が向いているということもね。君も知ってる通り、一中隊はそういったトラブル対応で動くケースがとても多い。二中隊よりも、君にふさわしい職場だと思う」

「……ジュリアスの推薦、ということですか」

「そういうことになるかな」

「そうですか」

ジュリアスにそこまで評価してもらったのは、とても嬉しい。だが、彼の推薦で、彼の兄のもとで働くことになるのは、正直、ありがたくなかった。

（もっとドライに割り切れればいいのに）

「……ジュリアスは、軍に復帰するんですか？」

聞く権利がないことはわかっていたが、聞かずにはいられなかった。

「いいや、しないよ。正式に除隊した。レイの会社に入社して、ちゃんと働いてるみたいだ。君のおかげだよ」

「私？」

ドミニクは小首をかしげ、優しい顔で小さく頷いた。

「この二年、あいつは世捨て人みたいな生活をしてたんだ。ほとんど部屋に閉じこもって、世間に背を向けて、家族としか会おうとしなかった。それを、レイがなんとか外に連れ出してくれて、彼の会社で仕事をさせてくれていたんだけど、まあ、やってるだけって感じでね。初めて君が会ったジュリアスは、そんな感じだっただろう？」

「……」

「そんなジュリアスの心を揺さぶって、感情を蘇らせたのは、君なんだよ、レスリー」

「……」

「心のホットラインをつなぐという、強引な揺さぶりかたではあったけれど、君の豊かで明るい素直な感情が、ジュリアスに生气を取り戻させたと、俺は思ってる。君と会って、髪を切って小ざっぱりとした格好に戻って、おしゃべりになったジュリアスに、母は感動して泣いていたよ。君に会いたいと言っていた。ジュリアスも会わせたいって言ったんだって？」

レスリーは小さく息をつき、肩を落とした。

ドライに割り切るどころの話ではない。ドミニクがここまでプライベートを持ち込むのなら、ここではとても働けない。

「命令ですから、異動します。ジュリアスの推薦も、ありがたいと思います。ですが、」

「ごめん！ 悪かった！」

顔の前で両手の平をあわせ、ドミニクは頭を下げてきた。

「今のは公私混同だった。ここに君を連れてきた時点で、かなりの混同だ。ごめん。悪かった。君がいやなら、もう話さない」

「では、もう、」

「だけど、もうちょっと、もうちょっと聞いてほしいんだ。俺に免じて！」

ドミニクに頭を下げられてしまっは、断れるはずもない。

「どうぞ」

「ありがとう。友人知人に言わせると、俺は相当な兄馬鹿でね。ジュリアスはこの二週間、君に会いたい、連絡をとりたいと願っている。でも、取れないでいる。理由はわかる？」

「.....私が連絡先を教えなかったからです」

帰国して、お別れを言うとき、ジュリアスから連絡先を聞かれた。また会ってほしいとも、直接言われた。それを全て断ったのはレスリーだ。

「それでも、君の自宅を知っているし、職場も知っている。会いに行くことは可能だ。それでも行かない。行きたくてもね。君の強い拒否を感じるんだそうだ」

驚いて顔をあげると、こちらをじっと観察するように見ていたドミニクの目と目があつた。

「会いたくない、忘れたいと思っている相手に、会いに行くのは難しい。特に君の感情は強くジュリに作用するしね。あいつ、ずっと悩んでる。君に何か悪いことをしてしまったのではないか、気付かず傷つけてしまったのではないか。化け物みたいな能力が、気持ち悪くなったのではないか」

「違います！」

「.....では、どうして？」

ドミニクの視線はまっすぐで、怖いほどだった。兄馬鹿なのは本当なのだろう。可愛い弟を傷つけるものは許さないという目だった。

うつむき、手のひらで口元をおおうことで、レスリーはドミニクの視線から逃げた。逃げたまま、言葉を探しつつ、ゆっくりと口を開く。

「ジュリアスとの仕事は、とても、楽しかった。彼の能力については、素晴らしいと思いきそすれ、気持ち悪いなんて、思ったこともありません。そんなこと、ジュリアスにだってわかっているはずなのに」

「仕事中、二人の関係はうまくいっていた。だが、終わった途端、うまくいかなくなった」

「当たり前じゃないですか。私とジュリアスは、仕事上の関係だったんです。仕事が終われば、関係だって終わります」

「そんなにきっぱりと、仕事とプライベートを割り切れるものかい？ 君たちは恋人同士のお芝居をして」

「割り切れます」

ドミニクの言葉を遮るように、レスリーはきっぱりと言ってのけた。

そして、ソファから立ち上がる。

「ジュリアスに伝えておいてください。私は傷ついてもないし、気持ち悪いなんて思ったこともないと。私達の関係は、仕事上だけのもので、また会うことがあるのなら、それは仕事の時だけだって。アンテナではなかった私とは、もう仕事をするつもりもないと思いますけれど。失礼します」

今この場がプライベートなのだと言ったのは、ドミニクのほうだ。だから、レスリーも、ドミニクのことを上司ではなく、知人の兄として扱い、軽く一礼しただけで、ドミニクの返事を待たず、彼の執務室から出て行った。

カリカリかくどころか、グリグリえぐってしまった感じだ。せっかくのかさぶたは、剥げ落ちてしまった。

しかも、この先、ドミニクの下で働くことになる。弟が可愛くて、まるで母親みたいに世話を焼く兄の下で働くのだ。

(ああ、もう、最低！)

思わず、手にしていた書類一式を、叩きつけるようにデスクに置いてしまった。

ちょっぴり派手な音がしてしまって、周囲の人々が、何事かとレスリーを見ている。

「あ、ごめんなさい、手が滑って」

二中隊のクールビューティーが、デスクに書類を叩きつけるなんて、イメージじゃない。皆、レスリーの言い訳を信じて、苦笑して視線を外してくれた。

(危ない危ない)

すました顔に戻して、綺麗な所作を心がけながら椅子に座る。デスクの上に散らばってしまった書類を集め、きちんと角を揃えると、デスクの端に追いやった。異動の書類なんて、しばらくは見たくもない。

それでも、真面目で有能なレスリーとしては、引き継ぎの段取りを考え始める。引き継ぎが必要なほど、重要な仕事などしていないけれど。そういった意味では、一中隊への異動は歓迎したい。忙しいけれど、やりがいは何倍もあるだろうから。

気持ちを切り替えて、席をはずしていた間に届いていた書類と郵便物のチェックを始める。二中隊長から承諾のサインが入った、今度の会議のレジメ。これは印刷に回す。そして、分厚い郵便物が一通届いていた。差出人の名前はなかったが、レスリーのデスクに届いたということは、赤外線などのチェックを通過してきた安全な物ということだ。袋の上から触っても、中に入っているのは、紙の束のように思えた。茶封筒の端っこを、慎重にハサミで開ける。中に入っていたのは、たくさんの写真だった。

「！」

何十枚、百枚ぐらいあるだろうか。たくさんの写真には、レスリーとジュリアスの姿が映っていた。

レイノックスで、恋人同士のお芝居をしていた時の、二人の写真。

手をつないで歩いている二人、顔を寄せて何か話している二人、レストランで仲良さそうに食事している二人。そのどれもこれも全て、盗撮されたものだった。